

支援の輪 第一弾 能登半島輪島市災害支援活動と別所岳

雑木の会 佐藤 俊明

- ・活動日 2025 年 6 月 21 日（土）
- ・支援先 石川県輪島市災害たすけあいセンター
- ・参加者 佐藤俊明・佐藤三枝子（雑木の会）、大見則親（OAR）、近藤和代（白峰山の会）、高桑昭夫（きたろう HC）、北川功（ももんが山岳会）、下窪義文（つりばし）

6 月 21 日(土)

のと里山海道も終点に近いころ、異様な横ブレに思わず、えっ居眠りっ、と、思わず身構える、続けて少しフワーとした上下動、「ゴメン」といって後ろの人達に気遣いを見せる運転者。

夜明けの気配がする道路に凸凹箇所が多くなる、無理やりつなぎ合わせたような、道路を注意深く進むが、更にそれが大きく波打ち、その災害の大きさと、兎に角ライフライン復旧を優先させざるを得ない現状が見える。

指定のボランティア集合会場着は、集合時刻の 4 時間前、揺れの無い車で少し仮眠と思ったものの、去年の元日「テレビは見なくていいです、早く逃げて下さい」と、衝撃的だった生放送から、1 年半の時を経ても未だ復旧半ばと報道される輪島港は目と鼻の先、仮眠は後にと先ずは視察へと向かう。

立ち入り禁止と書かれた港の設備や岸壁にひび割れと陥没、隆起したと思われる大きな岩や土の塊を片付ける作業が今日も始まるのであろう、沢山の重機や土砂運搬用のトラックが駐車されていた。

港に向けて 2 棟並んで立つ新しい大きなホテルは工事用みたいな塀で囲われている、見ていると何か自分の眼がおかしい、よく見ればわずかに傾いている。

輪島朝市と書かれた石標の近くには傾いた家屋が残り、かつて老いた婦人たちが店を広げていた石畳の通りは傾いて残された家屋や更地となった間を抜けている、焼けた電線が巻き付いた電柱が立つ、どんなに恐ろしかったことだろうか。

集合会場に戻れば、開始のオリエンテーション、挙手によるチーム分けの後、大まかな作業内容説明、選任なのかボランティアリーダーのシンプルで効率の良い進行は、阪神淡路大地震以来、味わいたくない経験を幾度も重ね、活動を全国に展開しながら成長させてきた結果なのだろう。

活動先への移動(車)はセンター準備の車貸与、確認は免許証の提示とアルコールチェックだけで、ボランティアがキーを受け取り、広い駐車場の中からその車を探し現場に向かうという全幅信頼型のなんと効率的な事だろうか。

依頼者の個人情報とプライバシーの保護と尊厳を尊重する、知らぬ者同士が共同で活動するボランティアメンバーの名簿扱いについての注意喚起、作業する上で判断に迷うことは、依頼者ではなくボランティアセンターに判断を求める、良かれとばかりの自己判断を慎む事等、独走暴走の歯止めを肝と捉えた見事な説明。

私達7名は、軽トラ2台と軽バン1台に分乗して少し遠い門前町へ、任務は傾いてしまった離れを解体する前に中の家財類を母屋と倉庫に移動させるというもの。

中でも大物は、家庭用冷蔵庫の2倍以上もあろうかという保冷库、さすがにこれには戸惑ってしまうが、リーダーはじめメンバー、7人寄れば文殊の・・・と、ばかりに、手際よく毛布、テコ、コロ、大型コンパネ等々使えるものを利用、まるで保冷库を要救出者に見立て搬出技術を駆使するかのように見事に移動してしまう。

次いで2階からの狭い階段が通過できない大型の机を毛布とロープでビレーしながら、窓からロアーダウンとこちらも見事にその術を駆使して移動、後は手渡しリレーと行ったり来たりの人海戦術で何とか格好がついた感じだ。

依頼者さんが無用という家具、道具類は軽トラ往復を含め計3台分を分別廃棄所へ移動、出発前のチーム分けでオリエンテーションリーダーから「おおさかさん・ろ・う・や・ま？」と、呼ばれたチーム7名は見事なチームワークで約6時間、ミッション完了。

お別れの際、少し老いた依頼女性さんと女性メンバーがハグ、「ありがとうまた遊びに来てね」と涙目で別れを惜しむ姿に、作業完了でホットしたこちらも慌てて上を向く、危うい所だった。

解散のオリエンテーションでは、これほど多くの人(ボランティア)がいたのかと思うほど、私たちのようにチームで来た人々、それぞれ個人で参加した人も俄かグループで力を併せ、老いも若きも、知らぬ者同士も力を合わせれば、目的を同じくした者たちだけがお互いの信頼とそれに応えようとする心意気が今日の成果だったのだろうな～と、しみじみ。

同行した女性メンバーさんから「応募はしたけど、私に何が出来るんだろうと少し悩んだりしたけど、やっぱり来てよかった」と、感慨のこもった一言。

又、明日どうしても外せない仕事があるからと、今からひとりでトンボ返りするというリーダーにお疲れ様と帰路の安全を祈りながらお別れし残留組はテント場へ移動した。

6月22日(日) 別所岳(七尾市)視察ハイク

復興支援活動の翌日、被災地で物見遊山てきな行動は疎まれるのを承知しながら、被災後の山事情現地視察と富山湾を跨ぎ立山の峰々を眺めようと支援活動の帰路計画に織り込んだ。

山腹には、のと里山海街道が走る、登山路近くの等高線が広がった辺りに水田記号がいくつも記されている、その現況をと目で追うも田んぼの存在すら確かめる事は出来なかった。

登山道のそこかしこにもやはり段差や亀裂、波打つ道、そして崩れた擁壁や土砂に塞がれるところが幾か所がある。

かつては養蚕が行われたのであろうか路傍に茂る幾本かの桑の木には小振りだが無数の実が生っていた、よく熟れた黒い実を口に含むとこの味この味、少し先に今度はぐみの木に鈴なりに実が付いている、これは赤い熟れた実を口に含むとやはり子供の頃のあの懐かしい味が口中に広がり子供の頃の味覚「この味」がよみがえる。

名は思い出せないが幼いころ生活圏にいくらかでも咲いていたヨツバシオガマに似た花芯を指でつまんで付け根を吸うとこれも又、「この味」だったと、遠い昔の故郷を思い出しながら緩い坂道を登る。

やがて傾斜が落ちる頃、開いたばかりの笹百合に迎えられそのすぐ先に三角点と別所岳頂上標識、目の前には七尾湾に浮かぶ能登島、その先に期待した立山、後立山は霞んだ先にぼんやりとした山並みとなり判別は叶わなかった。

広場のような頂きには、びっしりと実をつけたサクラの木が幾本も、訪れた人々はまさかこんな爪痕を残されるともつゆ知らず、花間から立山を眺めながら平穏に宴を楽しんだこともあったのだろう、屈託なく過ごした幼い故郷の思いを重ねながら僅か 2 km、標高差約 100m を約 2 時間かけてゆっくり往復した。

【参加者の感想】

■近藤和代(白峰山の会)

今回、輪島の災害ボランティアに参加して、復旧の遅れを非常に感じました。

取り敢えず、ライフラインだけ復旧させた後は手が付けられないままのほったらかし感を感じました。ボランティア先のお宅も後片付けが自分達だけでは出来ず、ボランティアさんの手を借りてやっとなのでした。

元々は一部損壊だったのが、1年半で半壊まで進んだとの事でした。

今回のボランティア先のお宅の方がとっても良い方で、沢山のお話も聞かせてもらえたり、交流も出来て良かったです。

■高桑昭夫(きたろう HC)

正月早々にテレビ映像などで、『遠い地で大変なことが起こって気の毒やなあ』と思っていました。大変なのはニュースでも感じられますが、1年半経っても阪神淡路大震災を経

験したものとしてはあまりにもその復興というか、現状変化が遅れている感は拭えないと目の当たりにしました。支援先の輪島市街の道路も凸凹のままです。この地域では、目立つ中層のホテルも傾いたままです。輪島に至る、のと里山海道ではいくつもの橋が崩落したままです。

支援活動は一般家屋の一部撤去に伴う家財移動などです。その中で、前支援者が出来なかった大型の保冷庫の移動を我々のチームワークで難なく移動できたのは、ちょっと自慢したい作業でした。

支援活動翌日に、標高 358m の別所岳に登りました。倒木や崖崩れなど登山道は荒れたままです。ライフラインが確立するまでは仕方ないことと思います。しかし、不謹慎ですがこの時期のこの山は、グミの実、桑の実、サクランボが甘く食べ放題でした。復興した時にはもう一度、食べ放題の山に登りたいです。

■佐藤三枝子（雑木の会）

2024 年元旦に発生した能登半島地震から 1 年半 復興を応援したいーそんな思いを胸に参加致しました。1 年以上経っても時が動いていないように感じました。

多くのボランティアが駆け付けていることに感動するとともに、私ももっと関心を持たなければと感じさせられた。

■佐藤俊明（雑木の会）

作業終了引上げ時、少し老いた支援依頼者が「また来てねー」と参加メンバーとハグ、今日の出会いと別れに顔を熱くして惜しんでいたのがとても印象的だった。

心のケアの重要性と、その取組状況は度々報道でもされているが、労務提供による支援も必要としているが、心の支援も重要なことを目の当たりにした思いだった。

■北川功（ももんが山岳会）

災害ボランティアに参加するのは初めてでしたが、手持ちのウェアやバックパック、登山靴、ヘルメットをそのまま持つていくことで新たに装備を買いそろえることはありませんでした。「災害現場ではゴム長靴よりも登山靴のほうが役に立つ」と聞いていましたが、その通りだと思いました。この点は山ヤの強みだと思います。

今回は独居の高齢女性のお宅の家財道具を運び出す作業でしたが、時間が限られていたこともあり完全に片付いたとは言い難く、未達成の感は否めません。家財道具は要るか要らないかを依頼者に確認しながら整理していきましたが、依頼者にとっては一つ一つに家族との思い出があり、それを聞くことも私たちの役目の内なのかなと思いました。もっと効率的に作業をするべきなのかもしれませんが、こういう気持ちの部分も大事なのだろうと思います。

■下窪義文（つりばし）

もっと早く支援活動を企画できなかったのか自身反省しています。

1 年半が経つこの日も全国から、社会団体、学生団体、個人のボランティア含めて 150 人以上が集まりました。市内では 800 世帯の仮設住宅で不自由な生活しています。

電柱は傾きまだまだインフラが復旧されていません。少しでも力になればと企画します。活動に参加すること力なり。



21日の支援活動
大型冷蔵庫を倉庫へ移動



依頼者宅で集合写真



22日 別所岳ハイキング (七尾市)



22日 さと能登海道SAからハイキング



軽トラックで集積場へ ⇒